

資 料

「自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会による 自由セント・ジョンズ教会小会への意見書」(1870⁽¹⁾年)を読む

三 野 和 恵

I 背景—自由セント・ジョンズ教会、トマス・チャーマーズ の「実験」と女子技術学校

本稿は、1870年にグラスゴーの「自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会」が発行した小冊子「自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会による自由セント・ジョンズ教会小会への意見書」(以下、「女性委員会意見書」)を和訳し紹介するものである。

自由セント・ジョンズ教会 (Free St. John's) は、スコットランド公定教会 (以下、「公定教会」) に属するセント・ジョンズ教区教会 (St. John's Parish Church) として、1819年にグラスゴーのマクファーレン・ストリートに設立された⁽²⁾。その経緯には、当時のグラスゴーという都市の独特の状況が反映されている。19世紀に入り、急速な産業化と都市化を迎えたグラスゴーでは、新興中産階級と貧困層の格差が深まり、住民らは居住地区や教育へのアクセスのみならず、教会とのつながりにおいても分断化された。折しも信仰復興運動や啓蒙主義を背景に高まっていた福音主義的風潮の中で台頭した中産階級は、自らの経済的成功を「救いの確証」として、貧困層の経済的困難を「怠惰」や「不道德」の印として捉える見方を強めた。市内の教会では、勢いよく進む教会設

立のための献金としての座席料を支払う能力を持つ中産階級が影響力を増した一方で、貧しい信徒のための席は撤去され、これらの人々は教会外部の「宣教対象」⁽³⁾として扱われるようになった。

セント・ジョンズ教区教会は、こうした事態を問題視した公定教会の牧師トマス・チャーマーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847) の率先で、(1)教区民の教育の充実、(2)家庭訪問による各人の状況把握を含む福音宣教的牧会、及び(3)現行の機械的な貧困救済措置の改革により、当時事実上麻痺していた教区共同体の再生を試みる「実験」⁽⁴⁾の要として設立された。先行研究が指摘するように、この「実験」では(1)の取組み—教区民の子弟を対象とする日曜学校 (sabbath school) と週日学校 (day school) を通した教育事業—においてもっとも大きな成果が見られた。⁽⁵⁾

他方で、同教会の「技術学校」については、「女性委員会意見書」に同校の教育方針に創始者であるチャーマーズの女子教育思想が反映されているとの記述が見られるものの、⁽⁶⁾設立経緯には不明な点が多い。ただし、その取り組みや設立時期についてはある程度まで知ることができる。例えば、セント・ジョンズ教区教会の後身である自由セント・ジョンズ教会が会衆に配布した小冊子『グラスゴー自由セント・ジョンズ集会の歴史及び財政に関する報告』(1848年)には、1848年1月30日の会衆年会に提出された報告書からの次のような記述が収録されている。「チャーマーズ・ストリートの女子技術学校」には「現在114名が出席しており、これは過去十二年間の標準〔出席人数〕である」。また「女子らの平均年齢は12、3歳である」。「会衆のうち30名の女性が〔技術学校が〕日々開講している聖書クラスを担当」するため、「二人の女性が一日につき一時間〔技術学校を〕訪れている」。さらに、近日、日中には「織工、糸巻き、糸縫り、綜統工として紡績工場、力織機工場、陶器製造所など」で働いており、「幼い頃に針仕事を教えられなかったより年長の者」—「14から20歳の者」—を対象とする「女子技術夜間学校」が設置された。同校の「40から50

「自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会による自由セント・ジョンズ教会小会への意見書」(1870年)を読む

名」の出席者らは、「週1ペニー」にて裁縫と編物を学んでおり、「同校は週に一度一人の長老の訪問を受けている」⁽⁷⁾。

これらの記述からは、1848年時点で自由セント・ジョンズ教会の「女子技術学校」が100名強の生徒を有し、その人数が「過去十二年間の標準」である—1830年代半ば以来の出席者数をほぼ確保し続けてきたこと、その教授活動が同教会の女性信徒らの助けを得て行われていたことがわかる。また、上記小冊子が発行された時期には夜間部が新設され、長老らを通して教会と連なりつつ運営されたことも窺われる。教授科目については、聖書クラスが毎日行われていたほか、特に夜間部に関する「幼い頃に針仕事を教えられなかったより年長の者のため […] 裁縫と編物を教授」しているとの記述から、おそらくは「針仕事」や「裁縫と編物」を中心としていたと考えられる。さらに、上記の記述には次のような注が付け加えられている。「この学校は、チャーマーズ博士の在任時期に創始され、以来大きな成功を収め続けている」⁽⁸⁾。チャーマーズのセント・ジョンズ教区教会在任時期は、1819年9月の教会創設時から1823年11月までである。このことから、技術学校はこの四年の間のいずれかの時点に設置された⁽⁹⁾とわかる。

同校に関する記述は、自由セント・ジョンズ教会の長老であるウィリアム・ケディー (William Keddie, 生没年不詳) が1874年に執筆した小冊子『グラスゴー公定及び自由セント・ジョンズ集会の記念誌』にも見られる。⁽¹⁰⁾

会衆らが教区教会を去った際にも、教区そのものの社会事業への積極的な関心は一糸も乱れなかったことについては、すでに述べた。〔教区と教区教会を去った会衆らの〕連携は、各地区での貴重な働きを以前と同じように継続した日曜学校の教師らによって保たれた。チャーマーズ博士が創設した教育機構の中でも人気を誇ってきた女子技術学校は、女性会衆らの努力で維持され、学校を民間の住居で運営せざるを得なくなった試練と困難

の時期を見事に生き抜いた。

引用文は、セント・ジョンズ教区教会の女子技術学校が同教会の女性信徒らによって運営されてきたこと、チャーマーズが教区に設置した教育機関の中でも特に「人気を誇ってきた」ことを示している。一方で、「会衆らが教区教会を去った」という表現が着目される。これは、1843年に起きた「大分裂 (the Disruption)」という出来事と関わっている。大分裂とは、チャーマーズをはじめとする一部のスコットランド公定教会聖職者と信徒らが、イングランド議会によるスコットランド公定教会の聖職者叙任への介入に抗議するために、1843年の総会場で公定教会からの分離・独立を宣言し、スコットランド自由教会 (Free Church of Scotland、以下「自由教会」)⁽¹¹⁾ を設立した事件である。この時、セント・ジョンズ教区教会でも一部のメンバーによる分離と自由セント・ジョンズ教会への組織改変が行われた。ケディーによれば、この時「セント・ジョンズの会衆の大半と教会役員の多く、すなわち18名の長老—2名を除く小会の全メンバーである—、及び14名のうち10名の執事」と「28名の日曜学校教師全員」⁽¹²⁾ が公定教会を去った。

また、上記の引用文は技術学校が大分裂後に「学校を民間の住居で運営せざるを得なくなった」事態にも触れている。「女性委員会意見書」は、「大分裂から数年が経った頃」に、公定教会側に止まったセント・ジョンズ教区教会の小会が、技術学校が従来使用してきた建物に対する権利を主張し、関係者の立ち退きを要求した出来事に言及している。同史料によれば、この時技術学校の教師と生徒の大半が「ムーア・ストリートの別の建物」に移動して活動を継続した。⁽¹³⁾ これらの記述から、引用文で触れられる「民間の住居」は、おそらくこの「ムーア・ストリートの別の建物」であったこと、同校が大分裂後には自由教会との繋がりをより強く持っていたことが確認される。

以上のように、自由セント・ジョンズ技術学校の初期、及び大分裂に前後す

る時期の状況については断片的な情報しか確認できない。一方で、本稿が紹介する「女性委員会意見書」発行時の状況に関しては、他の史料から多少の背景を窺い知ることができる。同史料は、技術学校を運営していた同教会の「女性会 (Ladies' Association)」のメンバーらが、当時同校が直面していたある問題に対する立場を示すために特別に組織した「女性委員会 (Ladies' Committee)」によって発行された。その問題とは、自由セント・ジョンズ年少者学校 (Juvenile School, 設立年未詳) の男性教員ジョン・クレイギー (John A. Craigie, 生没年不詳) による小会を通しての介入—女子技術学校の年少者学校への併合の提案—である。同冊子はこれに抗議し、それまでにほぼ自治的に行われてきた女性による女子教育の重要性を主張している。同史料にも触れられているように、同校は1860年にも同様の介入に直面しており、これら一連の出来事に関する記述は、自由セント・ジョンズ教会小会議事録 (1852-1913年) から確認⁽¹⁴⁾できる。

例えば、1860年8月13日に開催された小会の議事録には、当時の「年少者学校における技術教育の不足」の問題を改善するために、次の三つの計画が提起されたとある。すなわち、「(第一) クレイギー氏の女子〔生徒〕らが女性学校〔女子技術学校〕で毎日一時間裁縫を学ぶ。(第二) 女性学校〔女子技術学校〕をクレイギー氏〔の学校〕に併合する。そして、(第三) クレイギー氏の学校が専属の裁縫女性教師を雇う」。議事録によれば、第一の計画は試行されたものの、「いずれの関係者をも満足させなかったため」女性会によって停止された。第二の計画は「技術学校の特性を破壊するものであり、〔同校を〕創始した特別な目的と目標とは相容れないもの」であるとして女性会に退けられた。第三の計画は「競争関係にある二つの機関の設立」を意味し、「地区の教育的利益を事実上妨害することが予想される」と指摘⁽¹⁵⁾された。「女性委員会意見書」にも述べられているとおり、小会は最終的に当時の牧師ロクスバラ (John Roxburgh, 1806-80) 及び女性会と協議した勅任視学官⁽¹⁶⁾の意見を取り入れ、7

歳半以上の「幼児年齢を過ぎたすべての女子」は「男子らとは分け、技術部にて教育」することを、同年9月3日の審議にて決議した。⁽¹⁷⁾

また、1870年の状況に関する記録は同年3月7日の小会議事録に見られる。同日の議事録は、14年に渡って技術学校教師を務めてきたミッチェル女史(Elizabeth Mitchell, 生没年不詳)が体調不良のために辞職したと、及び同校が同年2月7日に勅任視学官の視察を受け高い評価を得たことを記録している。さらに、同日の議事録は1869年から1870年までの技術学校の財政状況を報告している。これによれば、同校には「書籍販売」などいくつかの収入源があるが、このうち最大のものが「学費」(69ポンド19シリング)であり、第二のものが「女性らの出資」(15ポンド)である。「女性ら」とは、女性会を示すものと推測される。換言すれば、女性会とは技術学校の運営費を出資する自由セント・ジョンズ教会の女性信徒らによって構成される、同校の運営決定機関であったと考えられる。予算報告の直後には、女性会による同校のための「継続的な奮闘と入念な経営」に対する小会の「深謝の意」も記録されており、当時の同校への評価の高さを示している。⁽¹⁸⁾

その上で、議事録はクレイギーが「女子技術学校の教師であるミッチェル女史の辞任を受け、学校を併合することが望ましい」との提案を持ちかけたことに言及する。これに対して小会は、「いかに望ましく思われるとはいえ、これまで当該学校を見事に経営してきた女性会の意見を窺わずしてクレイギー氏の考えを取り入れることは不可能である」とし、「同伴を詳細に検討し、必要に応じてこれを女性会に提示し、次回の定例会にて報告をするための委員会」としてテンプルトン(Templeton, 生没年不詳)、ブラッキー(Blackie, 生没年不詳)、及びサーモン(Salmon, 生没年不詳)を任命し、テンプルトンが委員長を務めることとなった。⁽¹⁹⁾

以上の記述から、1860年に一度問題となっていたクレイギーの学校と女子技術学校との併合案が、後者の教師であったミッチェルの辞任を契機に再度持ち

出されたことがわかる。同時に、女性会の技術学校運営を高く評価する小会が、クレイギーの提案には積極的ではないことも窺われる。このことは、テンプルトンに任命委員や女性会との協議を経た小会が、早くも翌4月4日の定例会議でクレイギー案を退け、現状を維持すべきとの結論に達したことから確認される。すなわち、小会ではクレイギーの提案と同問題を審議するために女性会メンバーが組織した「女性委員会」の意見書一本稿が紹介する「女性委員会意見書」である一を十分に検討した結果、上述の長老ケディーによる次の動議が採択された。小会は「イーストヒル・ストリートの学校で1861年8月以来実施されてきたやり方に完全に満足」しており、女子技術学校で提供されてきた「女性にふさわしい訓練」の「重要性を深く認識」している、したがって「クレイギー氏が提案するような一局的運営のもとでの学校の併合一重大なる効率悪化と女子学校の特性の変質につながりかねない一には、賛同できない」⁽²⁰⁾。これらの記述から、女子技術学校が1861年にはイーストヒル・ストリートに移動した⁽²¹⁾こと、自由セント・ジョンズ教会小会が、「女性委員会意見書」で主張される女子技術学校の意義と固有性一「女性にふさわしい訓練」一の主張をほぼそのまま受け入れつつ、クレイギー案を却下した⁽²²⁾ことがわかる。

以上から、本稿で着目する技術学校は、1819年から1823年の間にチャーマーズの率先で創設され、同校のために出資していたセント・ジョンズ教区教会の女性信徒らの組織「女性会」によって運営されていたことが確認される。また、1843年の大分裂後は自由教会側との繋がりを強めつつ活動を継続し、100名強の女子生徒に裁縫・編物などの技術教育、及び宗教・聖書クラスを提供し、人気を博していたことが窺われる。同校は1860年と1870年の二度に渡り、自由セント・ジョンズ年少者学校の教師クレイギーによる併合・男女共学化の働きかけを受けたが、一貫して独自の「特性」と「特別な目的と目標」一女性による女性のための「女性にふさわしい訓練」の提供一を守るべきとの立場を主張して退けたこと、こうした姿勢が小会や勅任視学官からの支持を受けたことが明

らかとなった。

以下に紹介する「女性委員会意見書」からも窺われるように、こうした女性会側の姿勢は、同会が資金的にも人材確保においても技術学校を自治的に運営していることへの自覚と誇りに基づくものである。このため、同じ教会に連なる教育機関の関係者とはいえ、クレイギーの働きかけは外部からの介入に類すると見なされた可能性がある。この問題を含む自由セント・ジョンズ技術学校の軌跡を詳細に検討する作業は、今後の課題としたい。ただし、自由教会はそもそも独自の運営決定機関を有する公定教会への世俗権力の介入に抗して設立された。このことを思い起こせば、「女性委員会意見書」からは、同時代の女子教育をとりまく状況を知る手がかりだけではなく、スコットランド自由教会関係者の自己認識や教会の性格を考察する上での重要な示唆をも見出すことができる。と指摘できる。

II 資料―「自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会による 自由セント・ジョンズ教会小会への意見書」

自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会による
自由セント・ジョンズ教会小会への意見書

グラスゴー：
ベル&ベイン印刷（ミッチェル・ストリート41番地）
1870年

自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会会議録からの抜粋。

=====

グラスゴー、1870年3月14日。

女性委員会はロクスバラ牧師宅にて、牧師主宰のもとで開催された。

とりわけ、一会議にはテンブルトン氏が小会委員会議長として〔以下を〕提出した—

1. 女学校はクレイギー氏の学校に合同されるべきとの氏による小会への提案。
2. 従来当該学校を運営してきた女性会に意見を求めることなくクレイギー氏の考えを検討することは不可能であり、テンブルトン、ブラッキー、及びサーモン三氏に任じて同問題を十分に検討し、必要に応じて女性らと協議し、次回の定例会議にて報告するための委員会を設置するとの旨の、小会会議録からの抜粋。

同委員会は、クレイギー氏の提案に対する意見を女性らに求めた。

女性らは、クレイギー氏の要請による問題は十年前に十分に検討され、当時の小会、女性会、及び勅任視学官の全一致により解決したばかりであり、そして重大な状況の変化もなく、また1860年の同意がきわめて満足すべき機能を果たし得ることが経験上明らかであるにも関わらず、〔同問題が〕再燃されることに対する驚きと遺憾の念を表明した。

小会委員会の依頼に応じ、彼女らは同問題全体に対する意見書を準備し、同月23日の水曜日に再び開会することを決議した。

1870年3月23日

女性委員会が開催され、〔出席者らの名を省略か〕らが出席した。ロクスバラ牧師が議長として主宰。

とりわけ、一クレイギー氏による学校合同の申請に対する女性らの考えが報告、承認され、印刷指示が出された。また、それぞれ一冊をテンブルトン氏、

及び自由セント・ジョンズ小会の全ての構成員に送付することが指示された。

意見書

1870年3月7日付の小会への陳情書において、クレイギー氏はイーストヒル・ストリートにおける学校の合同を提案し、また女性教員にふさわしい領域とは幼児学校〔the Infant School〕の担当、及び他の科目を男子と共にクレイギー氏より学ぶべき年長の女子への裁縫の教授であると述べた。そして、これを達成できなかった彼は、年長の女子を〔彼の学校に〕留め、彼女らに裁縫の女性教師を充てがうための許可を要請した—〔枢密院〕教育委員会が彼女らに裁縫を教えることを強く主張するので。

女学校に関する女性委員会は、これらの提案に対する考えを表明するようにと小会委員会に要請され、合同を支持する主張を検討し、それらが1860年にクレイギー氏が同様の提案をした際にやはり小会及び女性委員会〔女性会か〕によって却下されたものと同じであることを確認した。これらの主張を論破するに先立ち、技術学校の歴史と状況に短く言及することで当問題への理解を幾分か深めることができよう。

クレイギー氏は、グラスゴーにおいてそれは他に類を見ない学校であると言う。女性らにはこの言葉の正確さを確認する時間がないものであるが、彼女らの学校がかなりの程度にまれな機関であることを認めることはできる。〔まず〕その創始者であるチャーマーズ博士が大変たぐいまれな人物であった。女子教育における一つの重要な要素とは、衛生と秩序の習慣、及びその性別にふさわしい穏やかさと謙遜さを養成することであるというのが、彼の考えであった。そして彼は、女性教師にふさわしい領域とはこの養成を与えること、及び裁縫と他のあらゆる必要な科目の教育を施すことであると考えたのである。したがって読み方の基礎を共学学校にて学んだ後、女子は女性により教授され運営さ

れる学校へ受け渡されるように配備したのであった。〔そして〕女性らは自身の規律を有し、学生らを完全に彼女ら自身の管理下に置くことができるものとされたのである。

このようにして築かれた彼女ら同士の、及びセント・ジョンズ教区の住人らとの間の絆の尊さ、及びそれにより得られた相互への恩恵の大きさは、女性らが語るべきことではない。だが、女性らには次のことを言うことは許されよう。すなわち、その地域の必要性への適応、会衆一同からの強い共感への根付き、小会からの騎士道的な支持、あるいは良い考えに忠実たろうとする彼女ら自身の並々ならぬ根気強さから、あるいはこれらすべての要因により、彼女らの学校は尋常ならぬ活気を発揮しているのである。チャーマーズ博士の他の週日学校に建物が充てがわれていた中で、女学校は自らの施設のための賃貸を支払っていた。他の学校が資金を提供されていた中で、女学校は会衆の自由意志に基づく献金により、年間基金を設置した。1843年の衝突により他の学校が散り散りになり閉鎖される中で、女学校は一日も途切れることなく確固としてその道を歩んだ。この女学校が当教区における唯一の自由教会の学校であり、何年かに渡ってほぼ唯一の週日学校であったことに気づき、読むことのできない女子を対象とするものという当初のあり方から大きく離れ、通常の職務に加えて幼児科のようなものを付け加えもしたのは、この頃のことであった。

大分裂から数年が経った頃、セント・ジョンズ公定教会の小会が活動の兆候を見せ始め、女性らが賃借している建物に対する権利を保持していることから、彼女らとその教師らを立ち退かせ、自分たちで学校を継続しようとの考えを持つようになった。突如の停止通告を受け、女性らは従った。しかし〔彼女らは〕その学校を引き連れてムーア・ストリートの別の建物へ行き、〔学校を〕継続し、栄えた。〔公定教会に召し上げられた学校には〕たった一人の学生が止まり、空っぽになった教室は閉鎖せざるを得なくなった〔傍点部は原文イタリック。以下同様〕。

ヒル・ストリート学校が建てられた際、そのための献金が呼びかけられ、応じられた主な理由の一つは、女性らは現在近隣で賃貸できるものよりもっと良い施設に値するというものであった。これにより、彼女らはその新しい建物の最初の使用者となったのである。

今や非常に優れた建物を無料で確保してもらい、彼女らの学校はまるで息を吹き返したかのようであった。だがその足元には隠された危険が待ち受けていた。女性らは男子に教育をしたことがなく、幼児への教育にも関心を持たなかったことから、〔自由セント・ジョーンズ教区は〕男子及び幼児学校を加えることによりその教育機関を完成させるのが自然であったろう。その代わりに、次々と現れる進取的な男性教師らのもとで管理される共学学校が開校され、これに幼児科が付け加えられた。だが共学学校から技術学校へと進学する女子が現れる場合の対応はなされなかった。おそらくは、後者〔技術学校〕が教授する針仕事の指導に惹かれて、親たちが同校を選ぶであろうと思われた〔ためな〕のかもしれない。また小会は下の階に別の裁縫の女性教師を雇い入れることには常に反対していた。しかし男性教師らは上級学校への進学が確保されている教育機関〔feeder〕として幼児学校を有しており、彼らの〔学校の〕門が通りのすぐ横にあるために、親たちと学生たちはそこ〔男性教師らの共学学校〕に行ってしまった一女学校を訪ねに来た場合にもである。一度そこに着いたら、彼らはそれ以上来ない傾向にあった。いかなる女性教師にも対する自らの優越性を徹底的に説く男性教師らには、良心的に、彼ら〔親たちと学生たち〕を彼らがより良いと思う学校から、より劣っていると思う学校へと導くなどということは到底できなかったからである。

地域に確固として根付くその性質がなければ、女学校はその地位を奪われかねなかった。しかしながら、女学校は生き延びたのである。そして、男性教師らはそれ〔女学校〕が非常に手強い競争相手であることを知ったため、まもなく彼ら自身の学校への合同の提案という形での一連の直接的攻撃を仕掛けてく

るようになった。これらの攻撃は機会があるごとに新たに仕掛けられ、一度は、実際に合同が実施されたのである。彼女らが絶対不可欠であると考えているすべての特性が彼女らの学校から剥ぎ取られてゆくのを見て運営から身を引く中で。数ヶ月の取り組みの後、この合同の結果があまりにも不十分なものであったため、教会役員らは女性らに、どのような条件であっても受け入れるので〔女学校の〕運営を再開してほしいと懇願したのである。〔これに対し〕女性らは、男性教師らの介入を受けることなく、その学校を彼女ら自身のやり方で運営することのみを条件として要求した。だがしかし、そういった介入は止まることがなかった。そしてそれは十年前に、クレイギー氏が彼自身の学校での女子教育の設備に対して〔枢密院〕教育委員会が粗探しをしたのだという的外れな根拠を以て、女学校を彼に引き渡すようにと小会に要求したときに頂点に達したのである。女性らは今や自分たちで政府の補助金を安定して受けており、彼女らの学校が〔枢密院教育委員の〕方々及びその視学官により高く評価されるものであることを知っていた。したがって、彼女らは以前にも増してそれ〔女学校〕を死なせまいと決意し、小会もまた彼女らに完全に賛同したのであった。すると今度は、クレイギー氏は代替手段として彼自身で裁縫の女性教師を手配することへの許可を求めた。だがこの案は到底許容できないものとされ、彼の〔枢密院〕教育委員会との間の困難を取り除く唯一の満足すべき方法は、幼児科を出たすべての女子を、女学校へと進学させることであるとされた一男子はクレイギー氏のもとに留めつつ。他方で、女性らは彼女らの〔もとにいる〕幼児を幼児学校へと送ること、今後は7歳半以下の年齢の女子を〔女学校に〕受け入れないことに同意した。この取り決め、及びその根拠を説明する案内状が両校のすべての女子学生の親たちに送付され、親たちはこれに異議を唱えなかった。この手配は勅任視学官によっても認められたが、〔同視学官は〕自由セント・ジョンズ教会は今やグラスゴーで最も優れて整備された学校を持つに至っており、〔枢密院〕教育委員会は非常に満足している—その実、イン

グラランドにおける大半の公立学校〔Government Schools〕がこのような計画を実施中である、また〔枢密院教育委員の〕方々は裁縫の女性教師を備える共学学校を容認するものであるが、彼らは7歳以上の女子は男子とは別に、女性によって、そして可能であれば、女性らの監督のもとで教育を受けるべきであると考えていると述べたのであった。

その最新の報告書において、彼ら〔枢密院教育委員会〕は女性教師に対するスコットランド人の精神の啓蒙の成功は、いくぶんか彼ら自身の手柄によったのだと述べ、この考えに賛同するスコットランド人視学官の証言を引用したのである。すなわち：⁽²³⁾—

スコットランドにおいては、幼児に限定された部門を除けば、いかなる学校においても女性を雇用するということは、我々〔枢密院〕教育委員会の公的な記憶においてほぼ例のないことであった。そして我々の一部の前任者らによる、裁縫を教える女性を〔学校に〕導入しようとする要求は、国民的習慣に反するものとして激しく反対されたのであった。しかしミドルトン氏〔D. Middleton, 生没年不詳〕が今や報告している：—「以前は男性によって教育されていたこの地域におけるいくつかの小さな学校が、今では女性によって、より効率的に教育されている。この変化とは、私の理解するところによれば、しだいに国中に広まっている。実際のかつかりの程度に教育について知っている者で、この変化の有益性を疑う者に私は出会ったことがない。アメリカ合衆国における初等学校教育が女性らによっていかに広範に実施されているのかを知る以前に、我々は同じ方向に向かって歩んでいたのだ」。

それでは、クレイギー氏による合同〔案〕の根拠を検討しよう。

第一に、一彼曰く、女子及び男子校において同様の科目が教授されているた

めに、「教育効率の損失、及び的確な区分の欠如」がもたらされるに違いないという。これらの害悪が男子校に存在しているのであれば、名簿に掲載される〔学生の〕数がそれらを弁解しようもなく表すであろう。女性らと言えることは、彼女らによって雇用されている教師らは手一杯であるということ、そして十分な〔数の〕学級が配列されている一方で、それぞれの学級には十分に多くの女子らが通っているということ、したがって出席者数の大幅な増加がある場合には、彼女らはもう一人の教師を雇い、いくつかの学級を分割せねばならなくなるだろうということ、である。人数の多すぎる学級、あるいは教員人数の不足ほど、視学官がとがめるものはない。その最新の報告書において、スコットランド人視学官であるゴードン氏〔John Gordon, 生没年不詳〕が述べるに、改正教育令〔the Revised Code, 1862年〕下の子どもたちの個別観察の一つの有利な点は、それがいくつかの学校の分割に繋がったことである。すなわち、以前は一人の教師のもとにあった学校の、何人かの教師らのもとのいくつかの異なる学科への分割である。また、彼が加えて言うに、このことによってもたらされた組織の改善は「教師らの働きの区分、及びその範囲内におけるより明確化された担当業務によってのみ期待されるものである」ということである。⁽²⁴⁾

第二に、一女子たちが男性教師によって教育されていないという理由のために、多くの親たちが女学校から女子たちを転校させており、幼児学校もまた他の上級学校への進学を確保する教育機関としての機能を期待されるほどには果たしていない、という〔クレイギー氏の〕次の主張である。この点について、幼児学校の働きは、その責任者いかに大きく依存するものであり、また、その人物が女性らによる女子教育の方法に徹底して異議を唱える者であるということは、彼女らにとっては不利となり得るだろう。だがもしも、このような理由、及び他の包括的な根拠に基づき、女性教師が彼女自身の学校へ幼児学校を合同することを要求するようなことがあれば、女性らは彼女に、そのような提

案は非常に不健全であり、第十戒を想起すようにと助言することであらう。⁽²⁵⁾

彼女らとしては、一度は善意を持ち、かつ十分な根拠に基づいてクレイギー氏に幼児らを引き渡したのであるから、甘んじて約束を遵守するつもりである。

また、彼女らは多くの学生を幼児及び男子校に送り込むことに役立って来たのであり、これからもそうするであらう。クレイギー氏が優れた教師であると信ずるものであり、現在の配置に見られるように、彼の学校は必ずしも彼女らの学校とは敵対関係にはないことから、なおのことである。

後者〔女学校〕は常になんとかして自立的にやってきたのだが、一部の親たちが上述のような偏見を持って男性教師を好んでいるということ、また彼らにはすぐ手の届くところに多くの学校が選択肢として存在しているにも関わらず、クレイギー氏の主義に基づいて運営される〔学校を選んでいるということ〕は事実である。〔また、〕女性らはもう一つの不利のもとで働いている一すなわち、彼女らが提供できる文明化の影響を最も必要とする女子たち自身が、大抵はそういうことを全く重視しない親たちを持っているということである。とはいえ、そういった子どもたちは我々のもとへの道を見出すものであり、女子たちを男子たちとは分けるべきだときっぱりと考えている親たちもいるのである。これらの親たちが娘たちを入れたいと思うような学校が、グラスゴーに一校もなければ、さぞ困難なことになろう。

だが、第三に、クレイギー氏曰く、全てのスコットランド人の視学官を含む実際的な教育者らは共学学校を認めているのであり、一人のイングランド人視学官も同じ考えを持つようになったのだという。スコットランド人の視学官については、我々はすでに別々の部門に分けることの有用性についてのゴードン氏の言葉、及び女性教師の優位性についてのミドルトン氏の言葉を引用した。ウィルソン氏〔Charles E. Wilson, 生没年不詳〕は、女子は学校で男子と一緒にいると無作法で女性らしくなくなる、可能であれば、彼ら・彼女らを別々に教育する方が良いのだ、と我々によく話してきた。イングランド人視学官が一

般には共学体制を批判していることはよく知られている。意見を変えたその人物自身の言葉を窺うべきであろう。彼曰く：－⁽²⁶⁾

共学体制は立派に機能している。思うに、私はこれまで一度も、両性の混在による危険について述べる学校運営者の言葉を聞いたことがない。〔逆に〕私はよく、それ〔共学体制〕が授業などでの競争相手としての継続的な近しさにより、〔男女学生相互の〕兄弟的・姉妹的な感情をもたらしていると聞く。また、疑いようもなく、共学体制における女子らは、男子らの生まれつきに優れた計算能力の素質から得るものがあるであろう。疑いもなく、男子らは女子たちの非常に優れた読み方の能力、及び丁寧な言葉遣いと洗練された作法による質問への答え方から、さらに多くを得ることであろう（『ブルー・ブック』よりクレイギー氏が逐語的に引用）。

視学官らは無謬ではない。そして、自身らもいくらかの実際教育者としての経験を持つ女性らは、幼児年齢以上の女子が男子の学校にいること、また男性教師のもとにいることは非常に好ましくぬことであると固く確信するものである。また彼女らを、彼女らの兄弟でもない男子らに対する姉妹的な親しみを持つように訓練することは神の定めに反することであり、男子を改善する以上に女子からその性別の特質を奪うことであることは、経験上わかっているのである。共学体制を最もよく賞賛する者たちは、他の選択肢があれば自身の息子らや娘らをその学校には送らないのである。さらに、下層階級の女子らが、より良い状況下にいる女子らが享受しているような家庭からの多くの影響を欠いているために、彼女ら〔下層階級の女子ら〕に女性らしい教育を与えることの重要性が非常に高まっている。

ここで、ソマセットシャーの勅任視学官であるトレガーセン氏〔W. F. Tregarthen, 生没年不詳〕の言葉を引用したい。彼は共学学校について述べ

ており、ましなものを得られる者は、誰もそれら〔共学学校〕に満足しないだろうと考えているようである。彼曰く、彼の〔担当〕地域の⁽²⁷⁾ある場所において、

〔この〕一年に助成を受けた学校の大多数が共学と呼ばれるものである。これらの学校がそのような体制にある理由は非常に明らかである。別々の部門に子どもたち、あるいは資金を送るには、教区が小さすぎるためである。思うに、これらの学校において2倍近くもの女性らが教師として雇われているということは、残念なことではなく、むしろ喜ぶべきことである。疑いようもなく、このように男性教師よりも女性教師が好まれるのは、経済的な動機が最も大きいのであろう。だが私の判断する限り、これは儉約が良い方向性をもたらしたものである。

エセックスの勅任視学官〔Nevill Gream, 生没年不詳〕曰く、⁽²⁸⁾

一般に、女子らの方が男子らよりも計算能力で良い成績をおさめている。女子の方が男子よりも頭の回転が速く頭脳が明晰なようであり、あるいはより強い〔知的〕興奮を、より少ない精神的混乱を以て持続させるようである。そして、女子たちは裁縫のために多くの時間を割くことはできないが、一般に男子よりも正確な足し算に優れている。

女性らが思うに、エセックスの女子たちは特別に賢く、別の場所では男子の方が女子よりも計算能力に優れており、大概のことは男性の方が女性よりもより良くできるのではないだろうか。しかし、ミッチェル女史の学生らは午前中のみ授業を受けているにもかかわらず（午後は仕事に捧げられる）、彼女らの中で読み方、書き方、及び計算能力で視学官により合格とされた者の割合は、男性あるいは女性に教授されたかにかかわらず、常に自由教会学校の平均を上

回っている。そして自由教会学校は王国の他のいかなる学校よりもずっと先を行くものであることは、良く知られている。最新の『ブルー・ブック』には、1868年の試験結果が掲載されている。改正教育令下で試験を受けた英国中の全ての学校の平均に基づけば、不合格者の割合は：—

読み方	書き方	計算
8.97	11.51	22.3

自由教会学校の平均に基づけば、不合格者の割合は…

読み方	書き方	計算
1.36	6.74	11.58

同年のミッチェル女史の学校にて、ただし通常に比して、名簿に掲載される者よりも試験を受けた子がより高い割合であったが、不合格者の割合は…

読み方	書き方	計算
なし	3.7	2.47

現在空いている教師職への最も有力な三人の候補のうち、二人は現在、あらゆる年齢の子どもたちが男性教師の助けなく教育されるスコットランドの公立学校で働いている。彼女らのうちの一人が、彼女の学校に関する視学官の最新報告書を我々に送付したが、そこにおける不合格者の割合は、—

読み方、なし；書き方、なし；計算、3.5

ミッチェル女史の教師らの全員が、見習い期間を終えて師範学校に入学するにあたり、第一級で合格したという事実からもまた、より高度な科目に対する女性の教育能力を窺い知ることができる。1868年にグラスゴー自由教会師範学校で同じ試験が実施された時の男性教師の順位を確認するために再び『ブルー・ブック』に目を転じると、11名の男性のうち、3名が第一級、4名が第二級となり、4名が不合格となったようである。一方で12名の女性のうち、10名が第一級、そして2名が第二級であった。これはなんら特別なことでもない。

実に、男性教師に対する女性教師の優越性は今や非常に広く認められており、視学官の報告書もそれについて述べる説に溢れているほどである。彼らの何人かは、その部分的な原因は女子の方が男子よりも早く成熟すること、また男性の方が利益となる職業の選択肢をより多く持つことに関わっていると考えている。したがって最も能力ある男性の場合、最も能力ある女性に比してあまり教師職を取らないということである。いずれにせよ、今や女性は教師として男性との比較に十分に耐え得るものとなっているのであり、また、我々の教師が彼女自身の学校で最高級である限り、我々はいつでも平均以上の奉仕を確保することができるというものである。

第四に、一クレイギー氏曰く、彼の計画によれば学生らは「その課程を学ぶ間、同じ学校に止まる」であろうということである。これにより今以上の体制の統一性と連続性を確保できるようになると言いたいのであれば、彼は間違っている。なぜなら、我々の現在の手配では、男子は最初から最後まで彼のもとで学ぶのであり、女子は、彼のもとを去って、完全に一人の教師のもとに配置されることになっている。一方で「合同」学校では、男子と女子の双方が、男性教師へと手渡されるまでの間、まずは彼女自身の方法を追求する女性教師のもとの幼児科に配置されることとなる。そして、その後女子たちは、教育に対する考え方が非常に矛盾し合うかもしれない男性及び女性教師の間を行ったり来たりさせられることになってしまうからである。クレイギー氏は合同された学校の運営者及び教員は、その〔共学〕体制の効率的かつ調和的な働きを証明してみせるであろうと述べている。〔これに関して〕女性らが広範かつ詳細に調査したところ、大抵において合同の発起人である男性教師らは満足するかもしれないだろうが、女性教師については、より高度な科目の教授活動の欠落は彼女らにとって深刻な喪失となるであろうと口を揃えて申し立てている。また女性教師ら、及び彼女らに関心を寄せる女性ら〔女性会メンバー〕の両者は、男性教師による裁縫教授の時間に常に不満を感じている。なぜなら、男性教師

「自由セント・ジョーンズ技術学校女性委員会による自由セント・ジョーンズ教会小会への意見書」(1870年)を読む

の授業担当時間は男子に合うように設定されているものだからであり、彼は試験の際に自分自身の名誉が関わってくるような科目を男子にも女子にも取らせようと当然思っているからである。

この共学学校を肯定的に評価する証言をクレイギー氏に引用された同じイン
ランド人の視学官がその報告の少し後にて主張して曰く：⁽²⁹⁾—

想像してもみよ、男性教師もとの共学学校では、彼の担当するすべての学級で女子〔が加わること〕によってもたらされる仕事の激化は、毎日の午後の二時間の針仕事によって解消されるのである。その間、彼女らの同級生らである男子たちが彼女ら抜きで様々な科目の指導を受け続けるのである。

彼が提案する解決策とは、裁縫の時間を短縮するというものである。だがこれは男性教師にとっての害悪を解決するものではなく、自身らも裁縫し、読み、書き、そして計算することを学んできたことで、これらそれぞれに必要とされる時間数を最もよく知っている女性教師や女性らにとっても同様に満足できないものである。真の解決策とは男性及び女性教師のそれぞれに明確に区分された領域を与え、それぞれ自立的に〔independently〕働かせることなのである。

また忘れてはならないのは、最近グラスゴーで合同された技術学校はいずれも、厳密には我々のような立場を有してはいなかったということである。それらは、合同前には共学学校に付加された部門で、〔共学学校と〕同じ運営者のもとに配置され、〔枢密院〕教育委員会との間にはたった一人の連絡係を持ち、たった一つの時間割を有するにすぎないものであった。このため視学官は両者〔共学学校及び附設の技術部門〕を同日に査察しなければならなかったのである。これがいかに視学官の仕事を複雑化するかは容易に想像される。その年に一度の訪問にて、名義上は一つの学校であり、そのように報告しなければなら

ないものが、〔その実は〕二つの隣接する、しかもしばしば競争関係にある部門であることを見出すのであるから。このような変則的な状況に比べれば、いかなる合同であろうとほぼ歓迎してしまうのは視学官にとっては当然であろう。これに対して、我々の学校はこれまで〔枢密院〕教育委員会との関係、及び他のいかなる面においても常に独立してきたものである。同校は自身の連絡係を有し、他校に関係なく自身の補助金を獲得してきたのであり、〔隣接する男子校や幼児学校とは〕異なる日に視学官の訪問を受けることもあるのである。そして、1860年以来、それぞれの学校は明確に区分されかつ定義された領域を有してきたのである。

下の階に裁縫の女性教師を配置して別の女学校を設立しようという、クレイギー氏の第二の代替案が、我々がこれまでに回避してきたあらゆる害悪をさらに激化した形で生み出し、我々の全ての取り組みを地域の眼前で無意味なものとしてしまうであろうことは言わずもがなである。このような方法での学校の調和的な働きの確保の仕方は、彼以外の誰も支持しないのではないかと思われる。

最後に、女性らはこの意見書が長文となったことを詫びたい。クレイギー氏の企図を即座に退けることも当然できた。しかし、なぜ彼女らの女子たちを完全にではなく少しの間の時間だけ、すなわち一日のうちの1時間半でも、彼へと手放すべきではない〔と考える〕のかという理由を求められ、あまりにも多くの正当な理由が思い浮かばれ、止まりどころを見失ってしまったのである。彼女らは自身の権利を主張するよりは、むしろ理由を述べたいと考えるものである。しかし彼女らが授業時間の間に女子たちを徹底して自身らの保護下に置くことができないのであれば、彼女らは維持管理、運営、または学校の訪問などのあらゆる役割から身を引かねばならないと考えるものである。

注

(1) *Statement Submitted to the Kirk Session of Free St. John's, by the Ladies'*

Committee for Free St. John's School of Industry. Glasgow: Bell & Bain, 1870. Archived as *Statement Submitted to the Kirk Session of Free St. John's* (1897). Special Collections (A. a. 6.117/2), New College Library, the University of Edinburgh.

- (2) スコットランド公定教会とは、小会(Kirk session)―中会(Presbytery)―大会(Synod)―総会(General Assembly)の各段階に別れる合議体による教会運営を特徴とする長老派(Presbyterian)の教会であり、これらの合議体は聖職者と各教会で選出される信徒代表(長老)が構成していた。また、公定教会は各教会が教区(parish)と呼ばれる基本単位によって区切られる特定範囲の地域への牧会を担う教区制を伝統的に採用していた。このことは「教区教会」という名称からも窺われる通りである。
- (3) Brown, Callum G. *The Social History of Religion in Scotland since 1730*. London: Methuen, 1987, pp. 140-143. Smith, Donald C. *Passive Obedience and Prophetic Protest: Social Criticism in the Scottish Church 1830-1945*. New York: Peter Lang, 1987, p. 110. なお、この時期の中産階級の台頭と軌を一にするキリスト教宣教運動において、非キリスト教圏の「異教徒的『他者』」のイメージが本国イギリスの「暗く悪魔的な」「労働者階級」という他者イメージの想定を可能とし、これらの人々を「救済する」「敬虔な」イギリス人宣教師の自己イメージを支えたことについては、ジーン及びジョン・コマロフの研究に詳しい。Comaroff, Jean and John. *Of Revelation and Revolution: Christianity, Colonialism, and Consciousness in South Africa*. Vol. One. Chicago: The University of Chicago Press, 1991, p. 43.
- (4) Brown, Stewart J. *Thomas Chalmers and the Godly Commonwealth in Scotland*. Oxford: Oxford University Press, 1982, pp. 130-131.
- (5) Ibid., p. 135. 日曜学校及び週日学校は、いずれも労働者階級の負担にならない程度の少額の学費を子弟に課し、これを有閑階級からの献金と合わせて運営資金とした。毎週日曜に数時間の教授活動を行う日曜学校は、教会との密接な連携のもとで運営された。教師らは教会役員である長老・執事らと共に教区の運営方針を協議し、週日の間には教区の家庭を積極的に訪問し、子どもらを日曜学校へと送るようにと勧めて回った。読みと文法を教える英語学校、及び書き・算術・簿記を教える商業学校から構成される週日学校は、グラスゴー初の教区学校として1820年7月に創設されたが、教区のエデュケーション需要は高く、早くも一月後には飽和状態に達した。このため、1821年9月には同じく英語学校と商業学校から構成される新校舎が設立された。Ibid., p. 103, pp. 135-137. 学費の義務化には、特に貧しい教区民らに教育を上からの慈善としてではなく、子弟らへの投資として自ら積極的に関わるものと受け止めてもらう意図があった。こうすることで、これらの

人々の尊厳を損なうことなく、教育への関心を高めることができると考えたためである。Ibid., p. 136. Betchaku, Atsuko. “Thomas Chalmers, David Stow and the St John’s Experiment: A Study in Educational Influence in Scotland and Beyond, 1819-c. 1850”. *Journal of Scottish Historical Studies*. 27.2 (2007): 170-190, p. 174. 同様の考えは、チャーマーズの貧困救済措置の改革案にも反映されている。当時、グラスゴーにおける公定教会の貧民救済システムは、同市の計八つの教区の聖職者と長老が構成する「全体委員会（General Session）」が一括運営していた。同組織は救済措置申請者の名を公的に記録し、各人の状況を審議した上で、各地教会で集められた資金の配分の可否を判断した。Op. cit., Brown, *Thomas Chalmers and the Godly Commonwealth in Scotland*, pp. 98-99. チャーマーズはこうに一つの組織がグラスゴー全体の貧困救済措置を「上から」行うシステムを「人為的」なものとして批判し、むしろ教区というよりローカルな枠組みの中で、教会役員及び有閑階級から労働者階級を含む教区民同士の個別具体的つながりを基盤とする、相互の状況把握と支援関係を構築すべきであると説いた。Ibid., p. 123.

- (6) Op. cit., *Statement Submitted to the Kirk Session of Free St. John’s*, p. 3.
- (7) *Statement, Historical and Financial, of the Affairs of Free St. John’s Congregation, Glasgow: From the Disruption, May 18, 1843, to March 15, 1848*. Glasgow: W. G. Blackie and Co., 1848, p. 25. なお、引用文中の〔 〕は引用者による補足。以下同様。
- (8) Ibid.
- (9) Op. cit., Brown, *Thomas Chalmers and the Godly Commonwealth in Scotland*, pp. 140-143.
- (10) Keddie, William. *Memorials of St. John’s Congregation, Glasgow, Established and Free*. Glasgow: Thomas Murray & Son, 1874, pp. 44-45.
- (11) 1707年のイングランドとの合同以来、スコットランドでは各地教会の聖職者叙任を中心とする公定教会の運営決定権の範囲をめぐり、教会合議体と土地所有者などの世俗権力・国家との間の緊張関係が深まった。このため、公定教会組織内でも世俗権力の推挙により叙任された聖職者らが構成する穏健派（Moderates）と、教会合議体の自治と改革を呼びかけた福音派（Evangelicals）の二つのグループが形成された。大分裂により公定教会を去って自由教会を設立したチャーマーズらは、後者の福音派に属していた。Lord Rodger of Earlsferry. *The Courts, the Church and the Constitution: Aspects of the Disruption of 1843*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2008, p. 7.
- (12) これらの分離会衆らは、初めの一月ほどは他の公定教会からの分離会衆らと共に市庁舎にて日曜礼拝をまもり、その後の二年間はブラックフライヤーズ・ストリ

ートのイースト・リージェント・プレイス分離教会の会堂で礼拝を継続した。1845年6月、自由セント・ジョンズ教会の会衆は新たにジョージ・ストリートに設置された教会堂での礼拝を開始した。Op. cit., Keddie, *Memorials of St. John's Congregation*, pp. 35-36.

- (13) Op. cit., *Statement Submitted to the Kirk Session of Free St. John's*, p. 4.
- (14) Session Minutes 1852-66, GLASGOW, ST JOHN'S FREE CHURCH, U. F. (CH3/1162/1)., Session Minutes 1866-77, Ibid. (CH3/1162/2)., Session Minutes 1878-95, Ibid. (CH3/1162/3)., Session Minutes 1895-1913, Ibid. (CH3/1162/4). Glasgow City Archives, the Mitchell Library. なお、セント・ジョンズ教区教会初期の状況は次の史料から確認される。Session Minutes 1819-36, GLASGOW, ST JOHN'S (CH/176/1). Glasgow City Archives, the Mitchell Library.
- (15) Op. cit., Session Minutes 1852-66, GLASGOW, ST JOHN'S FREE CHURCH, U. F. (CH3/1162/1)., pp. 238-239.
- (16) 勅任視学官 (Her Majesty's Inspector of Schools) とは、各地学校を査察し、教師や学校への「専門的援助を与える」ことを目的に、枢密院教育委員会 (the Committee of the Privy Council on Education) によって任命される専門職である。同委員会は、貧困層子弟を対象とする教育機関への国庫支出による補助金 (1833年に導入) を管理し、教育水準を改善することを目的に1839年に設置された。高妻紳二郎「イギリス初期視学制度の機能と性格—勅任視学官の教育活動に関する事例分析 (1839-62年)—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第19号、九州産業大学、2001年8月、75-76頁、80-81頁。
- (17) Op. cit., Session Minutes 1852-66, GLASGOW, ST JOHN'S FREE CHURCH, U. F. (CH3/1162/1)., pp. 241-244.
- (18) Op. cit., Session Minutes 1866-77, GLASGOW, ST JOHN'S FREE CHURCH, U. F. (CH3/1162/2)., pp. 132-133. 1870年2月7日に同校を視察した勅任視学官は、具体的には次のような評価を述べたという。「これは大変優れた学校である。規律と秩序は実に申し分なく、指導は非常にしっかりしており、子どもたちの必要性によく適合している。その読みと宗教に関する教育は賞賛に値する」。Ibid.
- (19) Ibid., p. 133.
- (20) Ibid., pp. 134-136.
- (21) 1862年発行のグラスゴー郵便局住所録によれば、自由セント・ジョンズ技術学校、及びおそらくは同教会に連なる他の教育機関を含む「自由セント・ジョンズ学校 (Free St. John's Schools)」は共に「イーストヒル・ストリート21番地」に位置していた。このことから、これらの教育機関が同じ建物の異なる階を使用していた可能性を指摘できる。Post Office Glasgow Directory for 1862, 1863, Arran-

- ged in Three Divisions, General, Street, and Commercial; To which is Added, A Suburban Directory, With An Appendix Containing General and Local Information. Thirty-Fifth Annual Publication.* Glasgow: William Mackenzie, 1862, p. 97, p. 371. *Scottish Post Office Directories, National Library of Scotland.* 2012. 23 Jul 2018 <<https://digital.nls.uk/directories/>>. 同様に、1861年の『スレイター・スコットランド全国商業名鑑及び地誌』にも「自由セント・ジョーンズ学校、ヒル・ストリート、ガロウゲイトージョン・A・クレイギー（教師）、エリザベス・ミッチェル（女性教師）」とある。*Slater's (Late Pigot & Co.'s) Royal National Commercial Directory and Topography of Scotland: With a General Alphabetical and Referential List of the Nobility, Gentry, and Clergy. Embellished with a Large New Map of Scotland, Engraved on Steel.* Manchester: Isaac Slater, 1961, p. 958. Ibid., 23 Jul 2018.
- (22) Op. cit., *Statement Submitted to the Kirk Session of Free St. John's*, p. 3.
- (23) “The Report of the Committee of the Privy Council on Education to the Queen’s Most Excellent Majesty in Council. For the Year 1868”. *Report of the Committee of Council on Education; with Appendix, 1868–69.* London: George E. Eyre and William Spottiswoode, 1869, pp. vii–xlv, pp. xxxiv–xxxv. *Hathi Trust Digital Library.* 23 Jul 2018 <<https://www.hathitrust.org/>>.
- (24) Gordon, John. “General Report, for the Year 1868, by Her Majesty’s Inspector, John Gordon, Esq., on the Schools connected with the Church of Scotland, inspected by him in the Counties of Lanark, Renfrew, Dumfries, and Bute”. Ibid., pp. 325–342, pp. 330–331. Ibid., *Hathi Trust Digital Library.* 23 Jul 2018.
- (25) 「あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」（出エジプト記20：17）。『聖書（口語訳）』日本聖書協会、1954年。
- (26) Du Port, C. D. “General Report, for the Year 1868, by Her Majesty’s Inspector, the Rev. C. D. Du Port, on the Church of England Schools inspected by him in the Counties of Berks, Hants, Oxford, Surrey, and Wilts”. Op. cit., *Report of the Committee of Council on Education*, pp. 63–83, p. 74. *Hathi Trust Digital Library.* 23 Jul 2018. なお、（ ）内の注は原文では米印と脚注で示されている。『ブルー・ブック（Blue Book）』とは、勅任視学官らの報告書を含む枢密院教育委員会報告書を示すものと推察される。
- (27) Tregarthen, W. F. “General Report, for the year 1868, by Her Majesty’s Inspector, the Rev. W. F. Tregarthen, on the Church of England Schools inspected by him, in the Counties of Dorset and Somerset”. Ibid., pp. 241–259,

「自由セント・ジョンス技術学校女性委員会による自由セント・ジョンス教会小会への意見書」(1870年)を読む

p. 249. *Hathi Trust Digital Library*. 23 Jul 2018.

(28) Gream, Nevill. “General Report, for the Year 1868, by Her Majesty’s Inspector, the Rev. N. Gream, on the Church of England Schools inspected by him in the County of Essex”. Ibid., pp. 108–113, p. 110. *Hathi Trust Digital Library*. 23 Jul 2018.

(29) Op. cit., Du Port, C. D., “General Report, for the Year 1868”, p. 74.

*本稿は、日本学術振興会平成29年度海外特別研究員、及び国際基督教大学アジア文化研究所研究員としての研究活動の成果に基づく。

(第19期第3研究会による成果)